

# 核時代の英米文学者

## —清水春雄の被爆体験とアメリカ文学研究—

齋藤 一

### 1. はじめに

2017年に出版された川口隆行編著『〈原爆〉を読む文化事典』に、私は「英米文学者と核時代」という項目を寄稿し（齋藤 2017）、その中で1945年8月6日に広島市で被爆した体験を公表していた清水春雄（1903～1997）というアメリカ文学研究者について触れた。以下、該当部分を引用する。

北海道に生まれ、道内各地で旧制中学校の教師を務めた後、四十歳を過ぎてから広島文理科大学に入学、イギリス詩を学んでいたが、八月六日に広島市内で被爆した。急性放射線障害から回復したのち、岐阜短期大学（現・岐阜市立女子短期大学）、小樽商科大学、岐阜女子大学で教鞭をとった清水は、アメリカの「フロンティア・スピリット」について、そしてアメリカの詩人ウォルト・ホイットマンについて多くの論文を書いているが、特にホイットマンについての研究は二冊の著作、『ホイットマンの心象研究』（篠崎書林、一九五七年）と『ライラックの歌——ホイットマンの教説』（篠崎書林、一九八四年）にまとめられている。

清水は、これらの研究書で直接自身の被爆体験を述べてはいない。被爆体験を念頭に置いた作品解釈をおこなっているわけでもない。しかし「岐阜女子大学英文学会会報——昭和六十一年のまとめ」（一九八七年三月十五日）という小冊子に掲載された、清水の退職記念講演の記録である「辿った道」によれば、清水がホイットマンを研究した動機として「相手を知らずに戦って敗れた反省」があるという。清水は続けて、「僅か五分の差で原爆直撃を免れ、地獄の底から這い上がるように広島西郊の丘へ避難し、六日夜は炎上する市内を見ていたという清水は、「こちらに一億一心の大和魂があるとすれば、彼ら〔アメリカ人：引用者注〕には雑多の民族を短期間に纏めあげる何らかの要因があるに違いない」と思い至り、「フロンティア・スピリッ

ト」についての文学を学び、ホイットマンを学ぶに至ったと述べている。清水のアメリカ文学研究は、彼自身の敗戦体験、そして広島市での被爆体験へのある種の応答として再評価できるかもしれない。(140-1)

齋藤 2017 は事典の項目であったため、私は重要な資料の紹介や議論を割愛せざるを得なかった。2017 年以降に得た情報もある。本論文では、こうしたものの中から清水のアメリカ文学研究の特徴を伝えるものを選び出して紹介する。そして上掲引用最後のセンテンス、「清水のアメリカ文学研究は、彼自身の敗戦体験、そして広島市での被爆体験へのある種の応答として再評価できるかもしれない」を再検討し、被爆者であった研究者の心理的防御反応としてとらえる可能性を示す。

## 2. 被爆体験とアメリカ文学研究

1955 年 9 月、北海道の小樽市にある小樽商大学の学生新聞『緑丘新聞』に、学生たちの清水へのインタビュー記事が掲載された(清水 1955)。タイトルは「プロフィール 研究が唯一の趣味 清水春雄講師」で、私が清水に関心を持ったきっかけになった記事であり、齋藤 2017 の主要な参考文献である。全文を引用するが、一部プライバシーに配慮して割愛した部分がある。

軒下にまつかな酸葉が六つ七つさがつているのが見える。すがしがしい感じのする部屋に案内され、木目の目立つ大きなテーブルをはさんで向かい合う、先生は、とみる間にいそ〜と立ち上つて採点中の答案を引つ込めわれわれを歓待してくれる。

授業の時のいかつい表情は消えて思いのほかの話上手。以後二時間独りで話しまくる。

お生れは北海道の東端根室。生年は明治三十六年というから、おん年何才になるかしら(頭脳明セキなる諸君に任せよう)根室といつてもまだ汽車の通つていなかつた時代のことで、釧路まで船で出て来たんだそうだ。その商業学校を出てから、当時の小樽高商(齋藤注:現在の小樽商科大学)に入った。その頃の高商の様子など、こゝしばらく出したことがないというアルバムをめくりながら話し出す。

まことに勤勉な学生だつたらしく、在学中は常に首席を争い、しかも大正

十二年の卒業時には優等生として新聞に写真入りで報道されている。がしかし非常に謙遜されて「なあに、遊びすぎたか、そうでないかの違いですよ」という。(今の学生＝勉強せず＋遊ばず＝沈滞テナワケカナ?)とにかくその当時はすることが徹底していたそうでその頃のことを懐かしそうに目を細めて話される(この人が試験で学生を苦しめるとは実に意外!)先生の同期生には玉井助教授と原教務課長がいるが、クラスが違つてあまり知らなつた由。

その後中学の先生を二十年間程もやつたが、それに飽き足らず広島文理大に入つた。とにかく非常な晩学で、文理大にいた時は最老学生であつたという。そこでかの原爆の洗礼を受け、あぶなく九死に一生を得て、それから一ヶ月故郷の実家に帰つて治療し、やつと心身の健康をとりもどしたという。原爆のものすごさは想像以上で、その当座はヒューマニテイもなにも人間らしい感情はマヒし、肉親の死ガイを逆さにかついで歩く人達を見ても何の感じもしなかつたと、極めてたんへとした口調で話される。しかし生死のさ中でそれをはつきりと意識しているのをみても、それが精神的に大きな影を残しているようだ。こんなためか「戦争はいやだね」という言葉にも実感がこもる。

現在アメリカ文学を研究しているが、特にホイット・マンとマーク・トウエインには力を入れておられる。「アメリカ人の物の考え方を、文学作品を通して理解しようと思つた」んだそうで、ホイット・マンに関してとうとうの弁はつきない。

酒は付き合い程度、タバコも吸はず、マージャン、将棋、碁も、ちろんやらず、目下のところ研究が唯一の趣味というところ。「短大の主事の仕事も忙しくてね。今年の就職も頭痛ですよ」と笑われる。とにかく話すにも笑うにも実におしとやか。われわれはこれに感心しておいとしました次第。(短大主事)

これは大学の学生新聞によくある教員紹介記事ではあるが、1955年という時代の状況を伝えるものでもある。この記事が掲載されたページには、1954年3月1日に発生した第五福竜丸事件(ビキニ事件)以降急速に広がった反核運動の只中で開催された第一回原水爆禁止世界大会(1955年8月6日～8日、広島市公会堂)についての記事、濱林正夫「盛り上がる平和の力 痛感した被害者とのギャップ ～原水爆禁止広島大会の印象～」が掲載されていた。

反核運動のインパクトは遠く北海道の小樽市にまでおよんでいたのである。

この記事からうかがえる、距離や年齢をものともしない清水の行動力と決断力、そして学問への情熱には驚かされる。ただし本論で注目したいのは、清水の「精神に大きな影」を残した「原爆のものすごさ」の描写、「戦争はいやだね」という感慨、そしてトゥエインやホイットマンといったアメリカ文学を代表する作家の作品研究への傾倒が、あたかも時系列に沿って関連づけられているかのように構成されていることである。この記事の読者は、清水の悲惨な被爆体験や戦争体験がアメリカ文学研究、特にホイットマンとトゥエインの研究の動機になっていたと理解したかもしれない。しかし、引用は学生によるインタビュー記事であるため、清水自身がこのような関連付けをできていたかどうかを、清水自身の文章を検討しつつ確認する必要があるだろう。

1987年春、岐阜女子大学を退職する清水が、学生を含めた関係者の前で語った内容を活字化した「辿った道」という記事（全文）を以下に引用するが（清水 1987）、これは齋藤 2017 でも引用したものである。

「先生はどうしてホイットマンを研究したのですか」とよく聞かれますが、それは相手を知らずに戦って破れた反省からなのです。動機を少し話しましょう。僅か5分の差で原爆直撃を免れ、地獄の底から這い上がるように広島西郊の岡へ非難した私は、その夜すべて終わったという感じで、劫火に燃える市街を見おろしていました。思えば3千年の歴史と民族の純粋性を誇っていたわが国が、3百年ほどの短い歴史と人種のるつぼと言われる国に敗れた。こちらに一億一心の大和魂があるとすれば、彼らには雑多の民族を短期間に纏めあげる何らかの要因があるに違いない。それは何か。あの国では植民以来270年間も、夢を追う開拓線の西漸運動が続いたので、その間に希望と敢闘精神をわきたたせるフロンティア・スピリットが醸成されたであろう。その精神が文学に反映している筈である。そういう思いから、私は彼等の文学作品を通して、その国民精神を知ろうとしたのです。私の最初の論文の題は“The Significance of the Frontier Spirit in American Literature.”<sup>[1]</sup> そのなかでは開拓者精神の形成過程とその精神の表れとして、エマソンのアメリカ文化独立の提言、その実践者として、詩ではホイットマン、散文ではマークトウェインを扱いました。ホイットマンについては、以前に、有島武郎が『草の葉』の訳を出した頃、この大正デモクラシーの旗手の名につられて読んだことがあるのです。内容は難解でしたが、訳者が彼の思想について

「無限の大空を背景とした一つの星座の荘嚴と微妙を聯想させる。彼の傍らにあってはバイロンもシェレーも、ブレイクでさえもが影薄き理想の燐光に過ぎない」と激賞しているのが強く印象に残っていました。

本格的に原書でホイットマンに取り組んだのは戦後です。初めはその思想を理解する手掛りとして、『草の葉』の主要なイメージを追い、これを纏めて『ホイットマンのイメージャリー研究』（1957）<sup>[2]</sup>としました。これで大要は判りましたが、さらに全貌をとらえようと努め、最終的には系統的に解説する方法を考えました。なんとか出来上がったのが『ライラックの歌——ホイットマンの教説』（1979）です。<sup>[3]</sup>彼は自国独自の文学の樹立を希っていますが、それで終わるのではありません。元来彼は人間の霊と自然の霊の同一性を信じ、各自の自覚を促し、それによる人間性の完成と人類永遠の融和を夢みているので、その達成のために宗教的な民主主義の理想を説いたのです。これはたしかに「古くして常に新しき地上の夢」かもしれません。しかし、彼の描く逞しい愛の世界、流れてやまぬ宇宙の生命に参与する生の喜びは、まさに力を与える書というエマソンの謝辞に背きません。私が久しくつき合ってきたのもそのためです。

清水1987は、清水1955と同様に、被爆体験、敗戦の衝撃、そしてアメリカ文学への傾倒を時系列に沿って提示している。清水は広島原爆と太平洋戦争を生き延び、その体験をアメリカ文学者として理解することに努めたかのである。しかしことはそう単純ではない。上述したように清水1955と清水1987では、彼自身が自らの経歴を振り返り、被爆体験が画期となった敗戦体験があたかも彼のアメリカ文学研究のきっかけになったかのように語っている。しかし実際には、清水は自らのアメリカ文学研究に、自分の被爆体験をあからさまに関係付けることはなかった。それどころか、清水の書いたものをほとんど読んだ私も、彼の研究論文に「核」「原子爆弾」といった言葉を見つけることはできなかった。

清水と同世代のイギリス文学者・詩人に、原爆投下後に爆死した家族を探すために入市被爆をした大原三八雄（1905～1992）という人がいるが、この大原は、戦前から読み続けていたイギリスの詩人クリスティナ・ロセッティの作品をさらに読み続け、その経験から得た自らの英語力を活用して原爆詩の英訳アンソロジーの出版に尽力し、1957年に冷戦期の日本の原爆詩について批判的に述べたイギリスの詩人・批評家・編集者のスティーブン・スペンダーに応

答するなどして、自らの被爆体験と反核運動、そしてイギリス文学研究を関係付けた。<sup>[4]</sup>清水の研究は大原のそれと大きく異なっていたのである。

### 3. “The Atomic Bomb” (1946)

大原とは対照的な清水のアメリカ文学研究における被爆体験の不在について検討する前に、齋藤 2017 の執筆以降にその存在を知ることができた清水の英文被爆体験記 (Shimizu 1946) についてごく簡単に記しておきたい (このエッセイについての詳細と意義については別の機会に検討する)。2020 年 7 月、アメリカ合衆国の Library of Congress から私 (齋藤) に連絡があった。占領軍の一員として北海道小樽市に到着した空挺部隊所属の当時 19 歳の青年 Willard C. Floyd (1926-1985) 宛の清水春雄の “The Atomic Bomb” という手書きのエッセイ (1946 年 3 月 25 日付) が息子の Joel Floyd 氏によって公開されていたが ([http://joelfloydillustration.com/hiroshima\\_survivor\\_story.html](http://joelfloydillustration.com/hiroshima_survivor_story.html), 最終閲覧日: 2022 年 6 月 3 日), この資料がアメリカ公文書館に保管されることになったので、清水について情報を提供して欲しいということであった。私が公開していた科研費報告書のキーワード、Haruo Shimizu で私 (齋藤) が清水について調べていることを知ったという。その後の情報の交換のあと、2020 年 8 月、Library of Congress の Neely Tucker 氏による資料紹介のブログ記事 (<https://blogs.loc.gov/loc/2020/08/hiroshima-75-years-later-a-survivors-account-now-at-the-library/>, 最終閲覧日: 2022 年 6 月 3 日) が公開された。現在 (2022 年 6 月), 清水の “The Atomic Bomb” 他の資料の現物は The Willard C. Floyd Papers, 1944-1946 として Library of Congress に所蔵されている。

清水のフロイド宛の手書き原稿の冒頭には “The Atomic Bomb” The Impression of the Doomed Day, Aug. 6th, at Hiroshima というタイトルとサブタイトルが書いてある。続けて by Haruo Shimizu Student of the Hiroshima University of Literature and Science Official interpreter, and assistant manager of the Etchuya Hotel, March 25, 1946 Otaru, Japan と明記されており、最後に To PFC Willard C. Floyd, With best wishes as a token of friendship Haruo Shimizu Sept. 29, 1946 と記してある。Tucker 氏ブログ記事の情報、Library of Congress 所蔵の The Willard C. Floyd Papers の説明文 (上述 Tucker 氏のブログよりアクセスできる) を参照しつつ手書き原稿の文字情報

を明らかにしてまとめると、1946年当時の清水は広島文理科大学の学生で、進駐軍が正式に雇用した通訳として勤務しつつ、北海道小樽市の「エッチュウヤ・ホテル」（これはおそらく越中屋旅館であり、小樽市では歴史がある宿泊施設として現在でも営業中）<sup>[6]</sup>の「副支配人」であった。その清水は1946年3月25日に、日本語訳すれば「原子爆弾 運命の日、8月6日の広島」という題の英文被爆体験記を書き、若きフロイドに友情の印として1946年9月29日付で送った、ということになる。

この原爆印象記は、1945年8月6日の朝、市電に乗り、当時配属されていた軍需工場に向かうところから始まり、原爆の炸裂、悲惨な光景、逃げ惑う人々、工場にたどり着いたあとの友人たちとの会話などを、具体的な地名や人名などを明示することなく述べている。清水が被爆してから約7ヶ月後に英語で被爆体験記を書き残していたということは、彼がこの過酷な体験を何らかの形で後世に残したい、それを原子爆弾の投下の当事者であるアメリカ人にも読んで欲しいという強い願いがあったことは疑う余地がない。しかし以下で論じていくように、この被爆体験を直接的に自らのアメリカ文学研究に取り組むことはなかったのである。

#### 4. 「民族の純粋性」と「Frontier Spirit」

上述の清水1987によれば、清水は広島文理科大学に卒業論文“The Significance of the Frontier Spirit in American Literature”を提出しているが（1948年だと思われる<sup>[6]</sup>）、2022年5月現在、私はこの卒業論文の現存を確認できておらず未見である。ただしその内容は、清水1987の「（齋藤注：卒業論文では）開拓者精神の形成過程とその精神の表れとして、エマソンのアメリカ文化独立の提言、その実践者として、詩ではホイットマン、散文ではマークトウェインを扱いました」という記述から推測できる。本人の明言はないが、清水が1951年に岐阜短期大学の紀要論文として発表した「FRONTIER SPIRITのアメリカ文学に及ぼせる影響」（清水1951a）は、エマソン、トゥエインそしてホイットマンの作品に触れつつ「FRONTIER SPIRIT」の表現を論じているため、おそらくこれが英文の卒業論文の内容を踏まえたものであろう。

この論文は、その内容よりはむしろ、清水1955や清水1987で示されていた、清水の敗戦体験（被爆体験は書き込まれていない）とアメリカ文学研への

傾倒の記録となっている冒頭部分が重要であり、検討するに値する。

皇統連綿三千年の古い歴史と、民族の純粋性を誇っていた我が国が、植民地以来わづか三百年余りの短い歴史しかなく、而も諸人種雑居の地と思われていたアメリカの軍門に降つた。事実、Pilgrim Fathers渡航の1620年は、我が国では徳川二代將軍の時に当るが、日本歴史を神代から説き始めると、徳川時代はつひ昨今の出来事の様にしに感ぜられない。一つの国の成り立ちに三百年の月日は餘りに短い——歴史性の欠けた纏まりのない国に、深い叡智の源泉を求めることは出来まい——という理由からでもあらうか、アメリカ文学は戦前迄は、我が国に於て、欧州諸国のそれに比べて甚だ軽く扱はれて来た。従つてアメリカ文学もSamuel L. Knappの“You are aware that it has been said by foreigners, and often repeated, that there was no such thing as American literature.....” (*Lectures on American Lit.* 1829) という嘆きの言葉を極く最近に至るまでその儘に信じて、アメリカ文学と熟して唱えることに心進まぬ学者も少なくなかつた。

その様に、物質面は別として、少なくとも精神面に於ては脆弱性大なりと認められていたアメリカが、我が国を打負かした。虚脱より反省への六年を経た今、講和の秋、誇るべきは空しき時の流れや、人種の純雑の問題ではなく、その時の間に成し遂げられた人間の業にあるとわれわれは悟つている。が併し、広大な地域に、民族の垣塙と譬えられる程雑多な人種をかかえ乍ら、比較的短い年月の間に、よく之を纏めて一つの逞しい力に溶け込ました要因は、そも何であらうか。端的に云へば、今日のアメリカ精神を築き上げた要因は何であるか。(1)

この引用最後の問いかけの答えは「Frontier Spirit」ということになる。

注目したいのは、ホイットマン、トウェインそしてエマソンの作品におけるフロンティア・スピリットの表現を検討する必要があると説く清水1951aの引用部分は、清水1987とよく似ているということである。清水1951aの上掲引用における「皇族連綿三千年の古い歴史と、民族の純粋性を誇っていた我が国」や「民族の垣塙と譬えられる程雑多な人種をかかえ乍ら、比較的短い年月の間に、よく之を纏めて一つの逞しい力に溶け込ました」といった言葉は、清水1987の上掲引用における「一億一心の大和魂があるとすれば、彼らには雑多の民族を短期間に纏め上げる何らかの要因があるに違いない」云々という表



現の、俗な言い方をすれば元ネタであろう。

ただし、清水 1951a と清水 1987 には大きな違いがある。後者においては短くはあるが確かに語られていた被爆体験が前者においては全く欠けているのである。清水 1951a の上掲引用箇所が続く「アメリカが、我が国を打負かした」「虚脱より反省への六年を経た今、講和の秋」(1) という文言の「虚脱」という言葉の前には、清水 1955 や清水 1987 と同様に、広島市での被爆体験と敗戦体験が書き込まれていても不思議ではなかっただろう。しかし、実際には原子爆弾の投下に関する文言はないのである。

## 5. トウエインと「民主々義」

1951年3月に完成し同年8月に出版された、マーク・トゥエインの作品に解説と語注をつけた英語教科書、*Merry Tales and a Sketch* (清水 1951b) の「序文」においても、敗戦体験を連想させるキーワードは散りばめられているが、被爆体験につながる言葉は欠けている。

Frontier の自然素朴な環境に育ち、自由平等公正を愛し、骨の髄まで民主的な彼は、虚飾虚偽を嫌い、圧制暴虐を憎んだ。封建制度を罵り、欧州的文化を揶揄したのもこのためである。美辞麗句をしりぞけ、直截明快な寫実的な文体が生まれたのもこのためである。自らは民衆を entertain することを念願とし instruct する意志は毛頭ないと称しながらも、心底に燃ゆる烈々たる民主々義的社会正義確立の理想は蔽うべくもなく、恵まれた鋭い観察眼を以って、世相の矛盾、個人の罪悪を看破し、これを西部特有の humor に包みつつも辛辣に風刺した。笑いの中に考えさせる realistic な要素をひそめているのである。(中略)

本書に収めた三つの短編の中 The Private History of a Campaign that Failed は彼の南北戦争参加の humorous な体験記であり、A Curious Experience は同戦争当時の人心の動揺を諷した thrill に富むもの、共に Merry Tales (1892) より採録したのである。A Mediæval Romance は Sketches: New and Old (1875) 中にある小悲劇である。兎角思いつきで書くために纏まりの点に於いて難があるとされる彼ではあるが、劇的な構成の緊密さに於いても、優れた手腕のあることが、これによって示されるであろう。彼は中世を扱う場合は、華かな騎士道ロマンスの時代として愛惜の念を

以って顧みているのではなく、寧ろ封建制度の重圧の下に無自覚な服従と犠牲の日を送り、救い難い迷信の淵に沈んでいる一般民衆の生活が関心事であって、それは彼等に対する深い同情となって現れている。(v, vi)

この引用からは上述の清水 1951a に顕著であった太平洋戦争での敗戦と反省、「大和魂」に対応する「フロンティア・スピリット」の顕彰とその文学的表現、自らの被爆体験の抑圧といった特徴の変奏を読み取ることができる。具体的に言えば、上掲の引用には清水 1951a の冒頭に明記されていた敗戦と反省に関する言葉はないが、そのかわりに「FRONTIER SPIRIT」の体現者であるトゥエインが「自由平等公正」と「民主主義」の人であったこと、そして「封建制度の重圧」と「迷信」に苦しむ「一般民衆」への関心と同情の人であったことが語られている。清水 1951a で民族の純粋性の象徴としての「大和魂」と「FRONTIER SPIRIT」の重要性を述べた清水は、学生向けの教科書において「虚脱より反省への六年を経た今、講和の秋」に、「大和魂」と「皇統連綿三千年の古い歴史と、民族の純粋性」へのこだわりを捨て、「FRONTIER SPIRIT」がもたらす「民主主義」の価値を顕彰するようになったといえるのかもしれない。

とはいえ、この教科書はアメリカ文学を使ったアメリカ合衆国の精神とアメリカが作り上げてきたという民主主義の価値を戦後日本の学生たちに鼓吹するテキストであったと断定することもできない。上掲引用における清水の作品紹介は独特なもので、教科書に再録された作品を丁寧に読んだ学生の中には、清水の解説に思うところがあった者もいたのではないかと私は想像する。例えば ‘The Private History of a Champaign that Failed’ は、戦争を観念的にとらえていた「私」が敵兵を射殺するその瞬間に戦争のリアルさを覚醒するという「私」の告白物語であり、清水 1955 が伝える、被爆体験を学生に語った清水が学生に打ち明けた「戦争はいやだね」という感慨を、受講生たちと共有するようなものだったのかもしれない。また、‘A Mediaeval Romance’ をトゥエインの中世もの、すなわち「封建制度の重圧の下に無自覚な服従と犠牲の日を送り、救い難い迷信の淵に沈んでいる一般民衆の生活が関心事であって、それは彼等に対する深い同情となって現れている」作品の一つとして紹介するのは少々奇妙に思われる。この作品は、家父長制の元で王権を継ぐために父親から男装を強要された女性君主を男性だと考えて恋した女性がやがてこの秘密を知るに至り、民衆の面前で彼が彼女であることが暴かれるという作品であり、こ

の女性同士の感情の変化と男性権力者の欺瞞の暴露といういわばジェンダー規範と権力のあり方をめぐる語りが‘romance’に該当するものであり、「一般民衆」はこの作品においては声を持たず、物語の背景にその存在を微かに表しているだけである。この作品は、清水自身が述べているように、トゥエインの「欧州的文化を揶揄した」作品、つまり女性に男性のふりをさせるような事までおこなったという中世ヨーロッパの封建制とその男性中心主義への批判と読むほうがよいように思われる。清水の意図や解説の妥当性はどうかあれ、この教科書に再録されたトゥエイン作品には、民主主義はさておき戦争とジェンダー規範について、教師と学生が多事争論を引き起こす力はあったといってもよいだろう。

この後、清水はトゥエインから離れホイットマンに向かうことで、アメリカ文学作品の読み方を変えていった。この変化は注目すべきである。

## 6. 「片々たる心の動き」から「諸々相の奥」へ

すでに紹介した清水 1955 では、清水が当時ホイットマンを研究していたことが明記されているが、その研究の成果が 1957 年に上梓された『ホイットマンの心象研究』である（清水 1957）。その「はしがき」を以下に引用する。

ホイットマンが、『草の葉』を通して、われわれの心の眼に写し出そうとした世界は、どんなものであろう。生涯をかけて、一つの詩集をもり育ててくるには、詩人自らが、夢にも、うつつにも、絶えずまぶたに浮かべつづけてきた、美しい絵があったはずである。本書はそうした絵の、輪郭だけでも捕らえてみたいという動機から生まれた。

世俗的な名誉や富に目もくれず、社会、人生の真面目を解いて飽くことなく、悪罵にもめげず、嘲笑にもひるまず、まごころ一筋に、うたいつづけた清純素朴な詩人、彼ほど深く人類を愛し、人間性をその根底において、真剣に考え究めた詩人は少ない。

彼の詩には神話や伝説はない。ロマンティックな恋愛もなく、英傑の功業を中心とした事件もうたわれていない。彼はそういう詩題は、古い世界のものであり、封建社会にふさわしいものとした。階級的な差別のあるところでは、身分の高下に伴う、複雑な感情のもつれがあり、心の動きを写すには、格好の詩材を提供してくれるのであるが、彼はそういう詩は、新しい世

界の精神的な発達を害するものとしてしりぞけた。その代わりに彼は、新大陸の理想である、人の上に人なく、人の下に人なき、平等自由の世界を描こうとした。そして詩題として取り上げたものが、平凡な個人や大衆であった。彼は健康な普通人を基礎として、底深く築かれた文明が、人類永遠の栄に役立つとの信念から、複雑な技巧に墮する社会の弊を衝いて、自然の教えに眼を開かしめ、ともすればゆがめられる人間性を救おうとしたのである。彼は片々たる心の動きは問題にしない。動きの奥にある、変わらぬものを求めた。そしてそこに靈魂を見た。彼は、たとえていえば、心の海を、たちさわぐ波とは見ずに、碧かわらぬ水と見た。心の現象を写さずに、その本体を写そうとした。

彼の詩には、現実の社会のめまぐるしい諸々相が描かれている。しかし彼の心を惹いているものは、そうした変化そのものではない。彼が見たものは、諸々相の奥にあって、それらを統一する巨大な同一性である。彼はそれをも靈魂という。宇宙のすべてのものが、この同じ靈魂をわけもつ。物も、人も。そしてこれらはみな、互に引き合う力をもつ。これが、彼の「友愛は世界を支配する。」という信念を形づくる基盤である。彼は靈魂に関係のないものは何一つたわなないと言っている。(i-ii)

この引用は、清水のアメリカ文学研究における変化を示している。ここで本論において述べてきた清水 1957 に至る彼の研究論文や教科書を概説しておけば、清水 1951a においては、日本とアメリカが死闘を繰り広げた太平洋戦争と日本の敗戦、価値観の変化、サンフランシスコ講和条約という状況を意識しつつ、「大和魂」ではなく「フロンティア・スピリット」と、後者と関係する民主主義の重要性をエマソン、トゥエイン、ホイットマンから引用しつつ論じていた。清水 1951b では、教室で学生とともにマーク・トゥエインの作品を読み、「笑いの中に考えさせる realistic な要素をひそめてい」たことを語ろうとしていた。ところが清水 1957 の上掲引用においては、あたかもトゥエインを読む際には注視していた「realistic な要素」を捨象するかのようになり、清水は「巨大な同一性」「友愛」「靈魂」といった観念の重要性を読者に語りかけているのである。

清水 1957 の「目次」によれば、この研究書はホイットマン『草の葉』におけるさまざまなイメージ、「自己」「海」「母」「夜」「草」「性」「戦争」のイメージを分析している。しかし彼は、それらのイメージ群の相互関係や、それによ

る多様な読みの可能性に傾注するのではなく、引用冒頭に明記しているように「ホイットマンが、『草の葉』を通して、われわれの心の眼に写し出そうとした世界」のヴィジョンを探求しようとしている。つまり、「世相の矛盾、個人の罪悪」「片々たる心の動き」といった「諸々相の奥にあって、それらを統一する巨大な同一性」や「靈魂」といった抽象的な概念に注目している。そしてこの著作の「結語」において、清水はホイットマンが幻視した「靈魂」を「ホイットマンのいわゆる宗教的民主主義」（222）として提示している。

具体例として、清水 1957 の第 7 章「戦争のイメージ」を引用する。この章では、清水はホイットマンが南北戦争（1861-1865）への従軍体験を題材とした詩をいくつか取り上げ、次のような議論をおこなっている。

険に写った稲妻の閃光も、音と同様、なかなか消えない。戦前の作品にも、この光を主とした戦のイメージャリーが取り入れられ各所に書き加えられた。

(Lo, high toward heaven, this day,  
Liberated, from the conqueror's field return'd,  
I mark the new aureola around your head,  
No more of soft astral, but dazzling and fierce,  
With war's flames and the lambent lightnings playing,  
And your port immovable where you stand,  
With still the inextinguishable glance and the clinch'd and lifted fist,  
.....)

(By Blue Ontario's Shore, § 7)

(見よ、この日、高く天の方に、  
征服者の戦場から還って来た自由、  
御身の頭のまわりには新しい円光が明らかに見える、  
もはや弱い星の光ではなく、爛々として凄い  
戦火の焰と、きらめく電光が交っている、御身の立っている不動の姿、  
なお激しさ消えぬまなざしを向け、握りしめた拳をふり挙げている、  
……) (176)

1957年にこの引用を読んだ読者の多くは、12年前の1945年に至る前の年月に自らの生活と思考を縛っていた太平洋戦争に関する直接・間接の記憶をた

ぐりよせ、「戦火の焰と、きらめく電光が交っている」映像を想起した可能性はあるだろう。「なお激しき消えぬまなざしを向け、握りしめた拳をふり挙げている」「御身」とは自分自身のことではないかと考えた者もいるかもしれない。そして他ならぬ清水自身が、清水 1987 によれば、原子爆弾が広島市中心地にもたらした「戦火の焰」を避難先から望見して、ホイットマンの言葉を借りれば「不動の姿」を取っていたのだった。しかしそのような読者たちの個人的なテキストの読みの多様性が探求されることはなく、以下のように解釈されていく。

この「水碧きオンタリオ湖畔」の詩に対する加筆が最も多い。その理由は、元来この詩は（齋藤注：1855 年に出版された『草の葉』）初版の序を中心として詩化したものであるが、戦争を転機として彼の詩観に飛躍があったからである。この詩が最初発表されたのは第二版であって、*Poem of Many in One* というタイトルであった、現在のタイトルは 6 代目である。とにかくこの詩の現在の第 1 節は、次の句を含めて、8 行全部が戦後の加筆である。

「私のためにアメリカの魂から生まれた詩を、勝利の歌をうたってくれ給え、

そして自由の行進曲を奏でてくれ給え、いままであったものよりも更に力強い行進曲を、

そして君が去る前に、デモクラシーの陣痛の歌を私に歌ってくれ給え。」  
(177)

清水がここで注目しているのは、戦争の爆音や強烈な色彩に満ちた光景を生々しく表現するのではなく、「勝利」「自由」「デモクラシー」という抽象的な言葉が散りばめられた、それ自体が行進曲であるかのようなホイットマンの詩文である。また清水はここで、清水 1957 の「はしがき」からの引用の表現を借りれば、「諸々相」の表現それ自体の意味作用にこだわり続けるのではなく、「諸々相の奥にあって、それらを統一する巨大な同一性」の表現そのものであるかのような *Poem of Many in One* へと、ホイットマンがタイトルを変更したことにも読者の注意を促している。

清水は続けて次のように論じている。

こうして戦争のイメージは取り入れられてはいるが、残虐な戦争は忘

れねばならぬ悪であるとして、同詩第17節には、「あの実に殺伐凄惨な戦争、私がこれからさき、忘れようと思う戦争」と歌っている。戦争から隔たるにつれて戦争罪悪視の考えが深まっていく。そして戦争に示された逞しい力は失ってはならないとして、そのイメージリーが復興の歌に利用されている。(177)

広島市中心部を破壊した原子爆弾の惨禍を目撃しながらもかろうじて生き延び(Shimizu 1946, 清水 1955, 清水 1987)、1945年8月15日の敗戦の「虚脱より反省への六年を経た」(清水 1951a) 清水がたどり着いたのがこのホイットマン論ということになる。視点を変えて考えてみれば、このホイットマン論は、清水 1957 が出版される前年の経済白書(経済企画庁)の最後に書かれていたことで有名になった「もはや戦後ではない」というスローガンに象徴される戦後日本の社会の変化を背景に姿を表してきたアメリカ文学論というべきかもしれない。

このような「片々たる心の動き」や「諸々相」ではなくそれらの「奥にあって、それらを統一する巨大な同一性」を追求していこうとする清水の研究スタイルは晩年に至るまで変わっていない。1984年に出版された単著『ライラックの歌——ホイットマンの教説』(清水 1984)から、本人による概略を引用する。

要するに諸教説をまとめて一口に結論を言えば、まえがきに述べたごとく、彼は自然と人間との融和による人類の未来の完成を夢見て、その達成のために宗教的な民主主義の思想を説いているのである。これを体系的に見れば次のごとき図表となる(略)。その解説として一言すれば、まず源泉の項に自然と人間とを並べたが、ここで人間というのは現在の人間だけを対象としたのではなく、古今東西の思想、文化、人事の一切を含めているつもりである。これらを源泉として育くまれた汎神論的宇宙進化の信条を土台として、諸教説が幾多のテーマに分かれて説かれている。(中略)ただどの教説も宗教的民主主義の流れに注ぎ込まれて人間性の完成、それによる人類永遠の平和を目指して進んでいることは明らかであり、それは自然と人間との融和によってのみ達成せられるという大教説となっているものと考えられる。(219)

Shimizu1946で被爆体験を言語化し、清水1951aでは「皇統」や「大和魂」の無意味さを「反省」し、アメリカ合衆国の「フロンティア・スピリット」と「民主主義」を（学生と共に）文学から学ぼうとした清水は、上掲引用によれば、ホイットマンにおける「イメージ」と「教説」に、個別の事象を超越した「靈魂」や「宗教的民主主義」を見出すべく学びを深めたのである。これが清水の〈辿った道〉（清水1987）であった。

## 7. 「精神的に大きな影を残し」た被爆体験

前節で言及した清水1957の評価については、アメリカ詩の研究者であった石田安弘の評言が的確だろう。

清水氏の imagery 研究は、Caroline SpurgeonとC. D. Lewis (*The Poetic Image*, 1953) に触発されたものであろうが、イメージを手掛かりとして詩の核心に迫ろうという実験的・野心的研究である。わが国で初めて行われた作品研究としての意義を有している。「思想の究明は論理をたどるのが道であろう。しかし『草の葉』は詩である。詩は論理の世界のみに囚われていない」というのは言い得て妙である。氏はホイットマンの主要なイメージ、「自己」「海」「母」「夜」「草」「性」「戦争」をとり上げ分析を行う。氏の認識は正しいし、とり上げられたイメージはそれぞれそれなりに重要ではあるが、それらが平面的に羅列されている感があり、イメージ相互の関連が問われていないのは惜まれる。ホイットマンの場合、極限すれば「性」のイメージが、他の全てのイメージを包み込んでしまうかも知れない。またclusterをなし絡みついたイメージの根を根気よくほぐしていくと、思いも寄らぬところに行き着くかも知れないのだ。『『草の葉』の成長』と、『『草の葉』の基本観念』という最終2章の考察が、イメージ論の必然的発展としてではなく、旧来の方法論から為されており、「靈魂の旅」「宗教的民主主義」の観念のもとにホイットマンの思想が単純化されてしまっているのも惜まれる。当初の氏の意図に反し、詩的イメージが「思想」に屈服した結果になって終わっている。(92)

石田1984が述べているように、「『靈魂の旅』『宗教的民主主義』の観念のもとにホイットマンの思想が単純化されてしまっている」のは清水1957ばかり



りではなく、「宗教的民主主義」の「教説」を語る清水 1984 においても同様である。清水は、自らの被爆体験は折に触れて公言したものの、それを研究自体に明確に組み込むことはなく、敗戦体験の衝撃や葛藤を述べるのも清水 1951a で終わりにして、その後は個人的な衝撃や葛藤にはこだわらず、あったとしてもその最終的な解決策をホイットマンの「宗教的民主主義」のビジョンに見出したと、ひとまずはこのように結論してよさそうである。

清水の研究を、2022 年現在のトゥエイン研究やホイットマン研究の立場から批判することは私の能力を超えることであり、また私の意図するところではない。私が本論で示唆したいのは、石田 1984 が述べているように「cluster をなし絡みつけたイメージの根を根気よくほぐしていくと、思いも寄らぬところに行き着くかも知れない」という可能性を清水は理解していたのではないかと、それゆえに清水はむしろさまざまな「詩的イメージが「思想」に屈服した結果になって終わる」ように望んだのではないかとということである。

一例をあげる。本論第 6 節で取り上げた清水 1957 の第 7 章「戦争のイメージ」は、次の言葉で締めくくられている。

『草の葉』全体としての戦争のイメージアリーをみれば、戦争の酸鼻を極めた情景の利用はほとんどなく、寧ろ詩全体に光と音を注入して、進軍調を加えている。そしてそれは、魂の旅のイメージアリーを明るく強いものに仕上げた効果がある。魂の旅の本質に係るものとしては、戦争を個人の病気とひとしなみに考えている。それは一時の病状であって、剛健な人間性錬磨の一過程に過ぎない。永遠な人間性発達の途上において、転じて福となすべき禍であると見ているのである。(180)

「永遠な人間性発達の途上において、転じて福となすべき禍である」という言葉は、すでに紹介した「諸々相の奥にあって、それらを統一する巨大な同一性」であるところの「靈魂」や「宗教的民主主義」の一変奏曲である。このような抽象的かつ観念的な結論を出した清水は、2 年前の清水 1955 では、学生の前で次のように語っていたのを想起してもよいだろう。

かの原爆の洗礼を受け、あぶなく九死に一生を得て、それから一ヶ月故郷の実家に帰つて治療し、やつと心身の健康をとりもどしたという。原爆のものすごさは想像以上で、その当座はヒューマナイにも人間らしい感情は

マヒし、肉親の死が逆さにかついで歩く人達を見ても何の感じもなかったと、極めてたん―とした口調で話される。しかし生死のさ中でそれをはつきりと意識しているのをみても、それが精神的に大きな影を残しているようだ。こんなためか「戦争はいやだね」という言葉にも実感がこもる。

このインタビューを受ける9年前、つまり被爆して7ヶ月後に、清水は自分の子供でもおかしくない年齢の若いアメリカ人に理解して欲しいと願い、自らの被爆体験を英文で書き認めていた。そして被爆後10年の反核運動の盛り上がりの中で、清水は自らの被爆体験を淡々と語るものの、学生にも心の傷の大きさを悟られてしまっていた。彼は被爆体験を忘れることができなかった被爆者であった。心身を苛む衝撃や映像を何度も繰り返し鮮やかに想起したいと思う者は少ないだろう。ホイットマンの「戦争のイメージアリー」を、トゥエインの短編小説を読む時と同様に、作者の言葉が喚起するイメージや微細な意味を読者自らの体験と重ねて鑑賞することは、清水にとって危険であったのかもしれない。文学テキストの複雑で微細な意味作用の解読は、文学言語の持つ喚起力と、それに応答する読者の解釈との相互作用によって、読者を「思いも寄らぬところ」、思い返したくもない体験に幾度となく連れ戻してしまうかもしれないからである。清水が、例えば『『草の葉』全体としての戦争のイメージアリー』を石田1984が批判的とするところの「思想」で結論していることこそが、彼の被爆体験の影響であると考えられることも可能だろう。

清水は被爆体験を語らぬ人ではなかった。一度は私信として、二回目は学生のインタビューへの回答として、三回目は研究する人生の総括として、自らの被爆体験を言語化した。しかし彼はその体験を、文学テキストを精読し、作家が紡ぎ出したイメージの詳細な検討と結び付けることで事後的に追体験する可能性を排除するかのよう、詳細なイメージ群の検討とは対極の「思想」で自らの精神を守ったのではない。齋藤2017のセンテンス、「清水のアメリカ文学研究は、彼自身の敗戦体験、そして広島市での被爆体験へのある種の応答として再評価できるかもしれない」を、現時点の私は「清水のアメリカ文学研究は、彼自身の敗戦体験、そして広島市での被爆体験を思想的に超克したものであり、これは彼の抱えたトラウマ<sup>[6]</sup>の表れとして考えてもよいのかもしれない」と加筆修正しておきたい。

## 注

- \* 本論文は、日本英文学会関東支部（2015年秋季大会）での口頭発表「シンポジウム「日本・原爆・英米文学」被爆体験と「研究」——清水春雄について」の内容を再構成し、齋藤 2017 に加筆修正する形でまとめたものである。また Shimizu 1946 については、筑波大学比較・理論学会年次大会（2021年2月13日）での口頭発表「“The Atomic Bomb: The Impressions of the Doomed Day, Aug. 6th., at Hiroshima” ——清水春雄の Willard C. Floyd 宛書簡（1946年9月29日）について」と第63回原爆文学研究会（2021年5月2日）での口頭発表「「大和魂」対「フロンティア・スピリット」——清水春雄の被爆体験とアメリカ文学研究」での議論を一部利用した。
1. 雑誌『英語青年』第94巻第5号（1948年5月）の無署名記事「各大学英文科卒業生論文題目」（30-1）は東京大学、京都大学、東北大学、九州大学、東京文理大と広島文理大の卒業生の卒論題目を列挙したもののだが、広島文理大の卒業論文として清水の The Significance of the Frontier in American Literature という論文題目の記載がある（31）。清水 1987 が伝えるタイトルと異なり、“Spirit”の語が欠落している理由は不明。
  2. 正式なタイトルは『ホイットマンの心象研究』。なお清水が取得した博士号も全く同じタイトルである（立正大学文学博士、乙第49号、1983年3月2日、<https://ci.nii.ac.jp/naid/500000252104/>、最終閲覧日：2022年6月2日）。
  3. 実際には1984年の出版。
  4. 大原については齋藤 2014, 98-104, 齋藤 2017, 141, Saito 2021, 137-140 を参照せよ。
  5. 越中屋旅館の公式ホームページ：<http://www.etchuya-ryokan.com>（最終閲覧日：2022年5月30日）。
  6. 被爆体験とトラウマ概念との関係については直野 2019 などを参考にして、今後検討していく予定である。

## 参考文献

- 石田安弘（1984）「ホイットマン」『別冊 英語青年（特集＝日本の英米文学研究—現状と課題）研究社，1984年6月，92。
- 齋藤一（2014）「福原麟太郎・広島・原子爆弾——研究経過報告」遠藤不比人編著『日本表象の地政学——海洋・原爆・冷戦・ポップカルチャー』彩流社，79-108。  
——（2017）「英米文学者と核時代」川口隆行編著『〈原爆〉を読む文化事典』青弓社，138-142頁。
- 清水春雄（1951a）「FRONTIER SPIRITのアメリカ文学に及ぼせる影響」『岐阜短期大学研究紀要』第1輯，1-26頁。  
——（1951b）『Merry Tales and a Sketch』開隆堂（\*原著者はMark Twain）。
- （1955）「プロフィール 研究が唯一の趣味 清水春雄講師」『小樽商科大学緑丘新聞』第271号，1955年9月25日付（\*無署名の学生による清水へのインタビュー記事）
- （1957）『ホイットマンの心象研究』篠崎書林。
- （1984）『ライラックの歌——ホイットマンの教説』篠崎書林。

- (1987) 「〈辿った道〉」『News Letter』岐阜女子大学英文科。
- 直野章子 (2019) 「「トラウマ」からみる原爆体験—概念の系譜と応用可能性について—」『広島平和記念資料館資料調査研究会研究報告』第14号, 53-84.  
(\*この論文は以下のURLから閲覧利用できる。 [https://hpmmuseum.jp/modules/xelfinder/index.php/view/1797/14\\_naono.pdf](https://hpmmuseum.jp/modules/xelfinder/index.php/view/1797/14_naono.pdf), 最終閲覧日: 2022年6月6日)
- 濱林正夫 (1955) 「盛り上がる平和の力 痛感した被害者とのギャップ～原水爆禁止広島大会の印象～」『小樽商科大学緑丘新聞』第271号, 1955年9月25日付。
- 無署名記事「各大学英文科卒業生論文題目」『英語青年』第94巻第5号, 1948年5月, 30-31頁。
- Saito, Hajime, 2021: “Stephen Spender and Japanese Atomic Bomb Poetry in the 1950s” in Myles Chilton, Steve Clark and Yukari Yoshihara eds. *Asian English: Histories, Texts, Institutions*, Palgrave MacMillan, 127-143.
- Shimizu Haruo, 1946: “*The Atomic Bomb*” *The Impression of the Doomed Day, Aug. 6 th, at Hiroshima*,” Retrieved 03/06/2022 in [http://joelfloydillustration.com/hiroshima\\_survivor\\_story.html](http://joelfloydillustration.com/hiroshima_survivor_story.html)
- Tucker, Neeley 2020: “Hiroshima, 75 Years Later: A Survivor’s Account, Now at the Library,” Retrieved 03/06/2022 from <https://blogs.loc.gov/loc/2020/08/hiroshima-75-years-later-a-survivors-account-now-at-the-library/>